

## ■ ウインド Etc. (風のエトセトラ)

# 映画「LOVERS」を見て

～ 風になりたくて ～

2004年9月

(映画「LOVERS」を見て)

映像がとても良い色を出している。音楽もいい。でもとにかく小妹(ジャメイ)を演じるチャン・ツイイーがなんとも言えずいい。

小妹の、使命に懸ける澆刺とした意気地と、女の色香と、運命に対する諦めが、日本語の「いき」を体現している。中国語でなんというのか知らないけれど、恐らく同じような言葉があるのだろう。

スパイ同士の駆け引きと葛藤。一人の女を二人の男が争う。よくある題材だが、映像と音楽、そしてCGを駆使したアクションが盛り立てる。CGも最近のアメリカ映画のような極端でないのがいい。

女はどこで敵の男、隋風(スイフォン)に心を許したのだろう。どこで心を奪われたのだろう。女は男の嘘をどこまで見抜いていたのだろう。

映像は晩秋の中国の大地、竹林と草原と山の紅葉を映し出す。「不尽の長江はこんこんと来たり、無辺の落木はしょうしょうとして落つ」という、唐詩選にある七言律詩の一節を思い出す。

音楽では、ジャーンという高音域の弦楽器と太鼓の音がよい。隋風(俳優は金城武)が小妹の許に馬を疾走させる時、バックに流れる弦楽器と太鼓の音は隋風の心臓の音を連想させて、こちらの脈拍も上がってしまいそうだ。

最後の戦闘場面で突然雪景色に変わってしまう。これは撮影中に雪が降ってきたためだろうが、ちょっと残念。勿論雪景色はそれなりに綺麗だし、血の色を鮮明に見せたかったのかもしれないが、折角の晩秋の背景が中途半端に終わってしまい、突然の雪景色に戸惑いながら最後を迎えるのはちょっとひっかかる。さらに俳優の顔が吹雪に紛れて見難いのもよくない。できれば晩秋のまま最後を迎えて欲しかった。

隋風と相手の男、劉(リウ)が小妹を巡って戦っている。小妹は劉の手裏剣が胸にささったまま男たちの戦いを見守っている。最後に小妹は、自分の身体に刺さった手裏剣を抜いて男たちに向かって投げる。手裏剣を抜くことは自分の

死を意味するのだが、女にはもはや生への未練はない。しかし、最後に放った手裏剣は誰を狙ったのか。その手裏剣は、最後に愛した隋風の顔を掠めて木立に突き刺さった。愛した男を狙ったのか、その男を倒そうとしている相手の男、劉を狙ったのか、それとも空を狙ったのか。愛した男と一緒に死にたかったのか、愛した男を助けたかったのか、それとも自分を愛してくれたけれど、それに応えられなかった男への許しを乞うたのか。監督の意図は読めない。観客の想像に委ねたのだろうか。それはそれで構わないが、最後の女の表情に何がしかのヒントになる演技が欲しかった。

この映画を二度見てこのところがやっとわかった。芸が細かすぎて一度では恐らくわかる人は少ないだろう。女は隋風の戦っている相手の男、劉に対し、「隋風を殺したら私もあなたを殺す」という。それでも相手の男は手裏剣に手をかけて今し、投げようとする。その手裏剣は所謂最終兵器であり(それまで何時間も戦っているのに使わなかったのは不自然だが、それは物語だからやむを得ないとして)、それを投げれば隋風は死ぬことを意味している。ついに相手の男が手裏剣を投げた、ように見せて実は投げなかった。女は投げたと思って自分も手裏剣を胸から抜いて投げた。しかしそれは相手の男に向かって投げたのでもなく、まして隋風に向かって投げたのでもない。それは相手の男の投げた手裏剣から隋風を守る為に投げたものだった。その証拠に男が投げたように見せかけた時、手裏剣の代わりに一滴の血が男の手から飛んで、隋風に向かった。女の手裏剣は見事に一滴の血の滴をその刃先で受け止めて見せた。それが隋風の顔の前を掠めて飛んだ手裏剣の意味だった。その直後女はにっこりと微笑む。それは隋風を守ることができたという安堵の表情に他ならない。

一方相手の男は何故手裏剣を投げなかったのだろう。憎い恋敵を倒す為に何時間も格闘してきたのに。命を懸けて隋風を守ろうとした女の気迫に負けたのだろうか、女の気持ちがそこ

まで隋風に傾いてしまったことに打ちのめされてしまったのだろうか。監督は何故相手の男に手裏剣を投げさせなかったのだろうか。手裏剣を投げて、それを小妹の手裏剣が打ち落とせば観客にはもっとわかりやすいのに。手裏剣の代わりに血の滴を飛ばせたのは何故だろうか。監督の意図がいまひとつわからない。そういえば、この映画の最初のシーンでも血の滴を見せているのを思い出した。あれは最後のシーンへの伏線か。

いずれにしても、この戦いは終わってみれば隋風と小妹の完璧な勝利だった。相手の男、劉は完全に打ちのめされてしまった。

隋風が自分と一緒に逃げて風になろうと誘った時、小妹は相手の男のことを「何度も命を助けてくれた人だから」といって、隋風の誘いに無言の否を言った。それなのに、最後の最後に小妹は全てを擲って隋風を追った。

・ ・ 風になりたくて ・ ・

どうして女はみんな風が好きなんだろう

いずれにしても、小妹はとても魅力的で男の観客としては何度でも見たくなる映画でした。

#### 映画のあらすじ

[唐]王朝がその衰退を呈していた[[9世紀]中頃の中国では、政治の腐敗から国内各地に反政府組織が乱立していた。『飛刀門』という反乱組織を討伐するよう命を受けた捕吏（罪人を捕まえる役人）の劉（リウ）は、美しい盲目の踊り子・小妹（シャオメイ）を反乱組織の前頭目の娘と目して捕らえ、組織の情報を白状させようとする。口を割らない小妹を組織の一員であると確信する劉は、同僚の捕吏の隋風（スイフォン）に小妹を救出させ、逃亡の行方を追って組織の拠点をつきとめようと策をたてる。隋風は小妹を牢から救いだし共に逃避行の旅を続け、劉も2人の後を追う。2人の男と1人の女のあいだには、それぞれの策略と思惑と愛とが交じり合い、壮絶な最後に導かれて行く。

J J